



あっと
@JLとは？

全学日本語教育部門は、学生の日本語運用力 (Japanese Literacy) 向上をサポートする組織です。ここから、学内における日本語運用力向上にむけたさまざまな取り組みを広く発信したいという気持ちを、“@”に込めました。



全学日本語教育通信



座談会参加者：左から安本さん、稲葉さん、渡辺さん

特集
座談会

協同学修 による 小論文作成



1年生対象の全学必修科目「日本語表現T1」では、3本の小論文作成(→授業解説1)を通して、大学生として必要な文章表現力とは何かを学びます。教員による講義形式の授業ではなく、受講生が協同し互いに学ぶ過程を重視し、受講生自身が問題解決の手がかりを発見しながら文章力を向上させていく点に特徴があります。授業を通して受講生はどのようなことに気づき、何を学んでいるのでしょうか。受講生の生の声をお届けします！

【聞き手：入口愛 (全学日本語教育部門講師)】

グループワークが楽しかった(安本)

聞き手：今日は、本年度前期に受講を終えたばかりの3人の学生に集まってもらいました。まずは、小論文作成の3ステップの過程(→授業解説2)で、みなさんが学んだことを伺います。まず、第1ステップのグループワーク(ブレインストーミング)はいかがでしたか。

安本：自分では絶対に思いつかない意見が聞けて楽しかったです。

稲葉：そうそう。他人の意見で自分の世界が広がりましたね。意見交換が一番活発だったのは、最初のテーマ(所属学部の紹介)のときでした。入学して間もない頃だったので、自分の学部について知らないことが多かったのですが、同じ学部の人と共通の話題で盛り上がり、様々な情報を得ることができました。

授業解説1

2011年度の小論文テーマ

- ① 所属学部の紹介
- ② アルバイトは学業の妨げになるか否か
- ③ 安売り競争は是か非か

授業解説2

小論文作成の3ステップ

- ① グループで意見交換(ブレインストーミング)をしながら論文の材料を集める。
- ② アウトラインを考え、草稿を執筆する。
- ③ 受講生同士で草稿を添削し、指摘に基づいて完成稿を作成する。

聞き手：いい経験ができたようですね。実際に小論文を書く際、その経験をどのように活かすことができましたか。

安本：私は、小論文の構成（→授業解説3）のうち「自分とは異なる立場からの意見に対する反論」を考えるとときに役に立ちました。私が思いついた反論に対して、他の人が「論理的でない」と指摘してくれたこともありました。論の展開をグループでチェックできるところがよかったです。

授業解説3

小論文の構成

※原則として、①～④をふまえる。

- ① 自分の立場を表明する。
- ② ①の根拠を述べる。
- ③ 自分とは異なる立場からの意見を想定する。
- ④ ③に対して反論し、自分の意見の正しさを立証する。

他人の文章を添削する感覚で自分の文章を直せるように(渡辺)

聞き手：第3ステップでは、受講生同士で小論文を添削しました。学生同士で作品を読みあったことへの感想を聞かせてください。

渡辺：はじめは抵抗感がありました。でも、添削された文章を見て初めて自分の誤りに気づくことができたのでよかったです。

稲葉：指摘された箇所だけでなく、それ以外の部分も自分で考えて直すようになりました。草稿と完成稿とではずいぶん文章が変わりましたね。

渡辺：添削は二人一組ですが、自分が見過ごした部分をペアの学生が指摘することがありました。そのときの感覚を思い出しながら、自分の文章を見直すようになりました。

聞き手：相互添削は基本的に同じクラスの中で作品を交換しますが、最初のテーマ「学部紹介」だけは、全学部必修の利点を生かして他学部クラスと交換して読みあいましたね。そのときの印象はどうでしたか。

全員：おもしろかった！

渡辺：私のクラスではメディアプロデュース学部の紹介文を読んだのですが、授業の説明が詳細で、「楽しさ」が伝わってきました。他学部の内情を知る貴重な機会にもなりましたね。

書く力だけでなく話す力もついた(稲葉)

聞き手：最後に、この授業で学んだことを一つだけ挙げるとしたら、何でしょうか。

安本：書きことばを意識するようになったことです。授業をきっかけに、学術的な文章にふさわしい言い回しを辞書で調べるようになりました。

渡辺：私は文章構成に対して意識的になったことです。これまでは順序を考えることなく思いのままに書いていましたが、最近はまず文章のアウトラインを考えてから書くようになりました。

稲葉：議論の進め方です。グループワークのとき、途中で意見が出なくなったことがありました。そこで別の視点から議論を戦わせると、再びみんなが意見を出し始め、活発に話しあいができたのです。グループワークがあったから、書く力だけでなく話す力も身につけることができたのだと思います。

聞き手：それぞれによい点に気がつきましたね。その学修の成果を、ぜひ今後に生かしてください。本日はありがとうございました。



交際文化学部1年
渡辺佑貴さん



メディアプロデュース学部1年
稲葉 竜佳さん



人間情報学部1年
安本 葵さん

座談会を終えて…

受講生は学修の過程で、多くの発見をしながら確実に力をつけています。その姿に頼もしさを覚えました。(入口)



和気あいあいとした雰囲気の中、
座談会は行われました(2011年8月3日)。

ズム!
ズム!!

「日本語表現」全9科目から毎号1科目ずつ取り上げ
授業の様子を詳しくお伝えします。

第2回 日本語表現T2

(1年後期開講)

「日本語表現T2」は、大学の学修では欠かせないレポートの書き方とプレゼンテーションの基礎を学ぶための科目です。半期15回の授業で、テーマ設定、資料の収集、口頭発表、レポート作成という一連の流れを学修することができます。今回はその授業展開を紹介します!



「日本語表現T2」テキスト
(本学オリジナル)

ズームアップ

日本語表現T2

テーマ設定から
レポート提出まで

ここがポイント

STEP
1

レポート課題は、「時事問題の現状分析および争点の整理」。まずはテーマ選びから。

.....
学生が選んだテーマ（一例）

- 消費税を上げるべきか
- 代理出産を法律で認めるべきか
- 成人年齢を18歳に引き下げるべきか

STEP
2

データベースを使った論文の検索方法を学び、各自で資料を集めます。



STEP
5

15分間のプレゼンテーションを行い、フロアとの活発な質疑応答が展開されます。



STEP
4

発表資料の作り方を学び、グループでレジユメを作成します。



STEP
3

発表の構想や準備の状況について、5分間の中間報告をします。



STEP
6

発表内容を文章化するため、レポートの基本的な書き方やルールを講義形式で学びます。



STEP
7

作成した3,000字のレポートを受講生同士で添削します。



STEP
8

STEP7で指摘された点を中心に推敲し、完成です!



授業担当者からの メッセージ

全学日本語教育部門准教授
外山敦子

授業で最も大切にしているのは「他者意識」です。構成、論の展開、図表の使い方、出典表記など、「相手に確実に伝える」ための表現技術を、学生とともに追究していきたいと思います。



書く書く しかじか…

学生から、教職員から

学修の成果として 新聞投稿に チャレンジ

文学部教育学科1年
水野光理



水野さん(中央)と同じクラスの受講生

今回、自分の文章力を試す意味で『中日新聞』の読者欄に投稿し、幸運にも採用されました。

投稿当時、自動車関連企業は、震災後の電力不足により木・金曜の操業を土・日曜に振り替えていました。新聞では、「育児中の家庭は、土・日の子どもの預け先探しに苦慮している」様子を報じていました。そこで私は、反対に平日在宅のメリットを考えてみました。そのころの講義で、「一つのテーマを対立する二つの立場から述べる」文章の書き方を学んでいたからです。

作品が採用されて自分の文章に自信が持てるようになりました。学修の成果を生かして、これからも投稿にチャレンジしようと思います。

水野さん投稿文(2011.7.14「発言」欄掲載)

「節電で見直す一家の団らん」(概要)

節電が世の中に与える影響は大きく、不便を感じる事が多い。だが、デメリットばかりではない。家族と共にいる時間が増え、節電を機に家族の絆を再確認することもできる。

【補記】その後水野さんは再度投稿に挑戦。2011年11月6日付の同欄に2本目が掲載されました。

私たちが挑戦しました!

本年度、『中日新聞』に掲載された学生

| | |
|----------------|--------|
| 心理学部1年 | 吉田佳織さん |
| メディアプロデュース学部1年 | 二村有香さん |
| メディアプロデュース学部1年 | 松本莉奈さん |
| メディアプロデュース学部1年 | 高橋亨江さん |

図書館と 全学日本語教育部門 との連携

図書館長・文学部教授
久保朝孝



図書館は本年度、学生を対象として図書館〈書評〉大賞を創設した。図書館が主催し、部門が協力するというかたちながら、本年度前期・後期それぞれ120編を超える応募のうち、その大部分は日本語表現科目履修者だった。予備選者を部門の先生方をお願いしていることもあり、この事業は全学日本語教育部門の存在なくして維持発展が難しい。

一方、図書館は部門の要望に応じ、『日本の論点』『現代用語の基礎知識』を始めとする授業関連指定図書について、その設置規模及び場所等について格別の便宜を図っている。これは利用率がきわめて高く、すこぶる好評であると聞く。また、主要辞書データベースJapan Knowledgeを始めとする各種データベースの利用率も近年増加の一途を辿っていて、これは部門が制度化された時期と軌を一にする。図書館はこれに対応して、契約アクセス数を大幅に拡大している。

部門の教育に関わる諸活動が図書館の活性化を促進しているように、図書館も部門の一層の発展充実のためにできる限りの協力をしていきたいと考えている。



図書館〈書評〉大賞の授賞式(2011年7月29日)

インフォメーション

各種検定団体受検結果

日本漢字能力検定：受検者303人(2・3級合計)
(2011年6月4日実施) 2級合格者64名(合格率24.5%)

日本語検定：受検者160人(2・3級合計)
(2011年11月12日実施) 2級認定者32名
(認定(準認定含む)率 34.8%)

※漢検・語検ともに受検者数は過去最多でした。

編集後記

「日本語表現」科目開講から2年。多くの学生が様々な場で学修の成果を発揮しています。学生の活躍を本誌で紹介できることを何より嬉しく思います。(入口愛)

発行年月日 2012年3月31日
編集/発行 愛知淑徳大学全学日本語教育部門
〒480-1197 愛知県長久手市片平9
TEL: 0561-62-4111 (代表)
nihongo@asu.aasa.ac.jp